

日本福祉文化学会北陸ブロック 2015 年度事業報告書

2015 年 12 月 17 日

石井バークマン麻子

1. 現場セミナー実施報告

(1) 概要

北陸ブロックは、11月21日(土)夕方から22日(日)午前の日程で、福井県鯖江市で現場セミナーを開催した。開催にあたっては鯖江市の後援も得た。「障がいのある人が生き生きと働く職場とは -チャレンジの経験から考える-」をテーマに、昨年12月にオープンした JR 鯖江駅舎2階の“えきライブラリー”内“cafe&sweets こころ”を会場とし、当日の参加者数は74名(申込者数は63名)であった。シンポジウムでは、“NPO法人小さな種・こころ”で働くチャレンジト(発達障害や知的障害、精神障害等のある当事者たち)4人の方に経験や意見をお話しいただき、会場と一緒にこのテーマについて考え合うことを目的とした。パネリストたち各々の過去と現在の経験が率直に語られると、会場には静かな共感と話に聴き入る心の動きが伝わるような空気が広がり、真剣且つユーモアのある温かな雰囲気にも包まれた(詳しくは、P3からの岡本ヒロ子さんの感想を参照いただきたい)。シンポジウムの後に設定した情報交換・懇親会では、こころ特製の手打ちそばやシフォンケーキ等を堪能しながら、ざっくばらんな話し合いを行い、1時間半ほどで閉会した。

2日目には“cafe&sweets こころ”での朝食から始まり、法人理事長の清水孝次さんによるミニ・グリーンツーリズム(原木しいたけぼだ場とこころファーム見学)と鯖江のメガネ会館見学を行った。

(2) シンポジウムの構成

11月21日(土)の18時30分から20時45分をシンポジウムの時間として設定した。小さな種・こころで働く小林さん(こころファーム勤務)、松田さん(そば指導職員)、奥野さん(そば職人)、畠中さん(ご家族)の4人がシンポジストとして参加して下さった。コーディネーターは宮川深雪さん(NPO法人小さな種・こころ所長、学会員)にお願いし、コメンテーターは清水孝次さん(NPO法人小さな種・こころ理事長)と石井バークマン麻子(福井大学)が務めた。

(3) 参加者

シンポジウムの参加者数は74名であり、その中学会員7名(北陸ブロック3名、北海道1名、東京都2名、大阪府1名)、非学会員は67名であり地元福井県からの参加であった。

今回のチラシはカラーで500部用意し、地元鯖江市の市民や福祉関係機関、関連団体はもとより、鯖江市とその近隣の市町ならびに福井市の特別支援学校 PTA 等を通じて保護者と教員に配布した。当日は障がいのある子どもとその家族が3組、きょうだいも含めて家族ぐるみで参加した。また特別支援学校や高等学校の教員、障がいのある人が地域で生きるためのサポートセンターの当事者でもある職員、大学生らも参加した。なお後援いただいた鯖江市からは、鯖江市長はじめ3名の参加があった。なお、2日目の参加者は県外からの参加者を中心に7名が参加した。

パネリスト

コメンテーター





総合司会の宮川さんと参加者

(4) 実施体制

北陸ブロックでは、今回現場セミナー実施委員会を次のように組織した。

実行委員長：清水孝次（NPO 法人小さな種・こころ）

実行副委員長：宮川深雪（NPO 法人小さな種・こころ所長）

事務局：石井バークマン麻子(福井大学) ボランティア：福井大学生 5 名

2015 年度日本福祉文化学会 北陸ブロック主催現場セミナー



テーマ 障がいのある人が生き生きと働く職場とは
— チャレンジドの経験から考える —

“特定非営利活動法人小さな種・こころ”の活動の展開について知っていただくとともに、ここで働くチャレンジド（発達障がいや知的障がい、精神障がいのある当事者たち）の経験と意見を出発点に、やりがいや課題について参加者と一緒に考えていきたいと思えます。

とき 平成27年11月21日(土)18:30～21:30
ところ JR鯖江駅二階“えきライブラリーte to te”内“cafe&sweetsこころ”
参加費 無料
●20:30～ お飲物、スイーツ、お蕎麦も有料でお楽しみいただけます●

主催：日本福祉文化学会北陸ブロック / 現場セミナー実行委員会

共済：日本福祉文化学会

後援：鯖江市



石井パークマン麻子
日本福祉文化学会理事
福井大学教育地域科学部教授



清水孝次
特定非営利活動法人
小さな種・こころ理事長

コーディネーターの紹介

お申し込みは、申込書に記載の上、11月18日までにFAX、または同内容をEメールで日本福祉学会・北陸ブロック事務局石井パークマン宛に送信してください。

mail:a-ishii@u-fukui.ac.jp(事務局：石井パークマン) /FAX:0776-27-8789

健全者と共生する環境を

鯖江で 障害ある人の意見聴く

鯖江セミナー 日刊県民福井 2015.11.23

あいさつする石井バークマン麻子さん(中)鯖江市の「えきライブラリーtetote」で



鯖江市で働く、障害などのある人たちの声を聴くセミナーが二十一日夜、鯖江市日の出町の「えきライブラリーtetote」(とて)で開かれた。市民ら約六十人が、障害者と健全者が共生する環境づくりを考えた。

「障がいのある人が生き生きと働く職場とは」をテーマに、日本福祉文化学会(事務局・東京)の北陸ブロックが主催した。聴く機会の少ない障害者の声から、仕事の悩みや受け入れ側の課題を考えるのが狙い。

鯖江市内でカフェや農園

を経営するNPO法人「小さな種・こころ」(清水孝次理事長)で働く障害者二人と保護者の計四人が体験を話した。こころには、障害者二十二人を含む三十四人が勤務し、勤務時間も一人一人の症状に合わせている。

うつを患う男性(左)は十年間寝たきりだったが、体の痛みが改善傾向で、六月から同市中野町にあるこころの農園で働く。「勤務前は自殺したいほどのつらさ。うつは心の弱い人がなるのではな、と訴えてこ

双極性障害(躁うつ病)の男性(三)は通勤中に体の震えが止まらず、休むことが続いた。そのたび母にうそをつく自分を責めたが、清水理事長に相談し「正直に話せたことで症状も良くなっている」と振り返った。

日本福祉文化学会理事で、福井大教授の石井バークマン麻子さんは、こころがさまざまな事業を展開していることを踏まえ「こころのように、多様な症状の人たちがやりたい仕事を選べるのが大事。信頼関係も築けているので、生き生きと働ける」とまとめた。

(松原育江)

3. 参加者からのご意見

感想を寄せてくださった方々が複数いらっしゃいましたが、紙面の関係上、岡本ヒロ子さんから寄せられた感想を、ご本人の了解を得た上で以下に掲載します。

2015 年度日本福祉文化学会北陸ブロック主催 現場セミナー

「響き合う会場の熱気 ～皆が創り上げた現場セミナー～」

日本福祉文化学会関西ブロック 岡村 ヒロ子

二年前、「障がいのある人の生きがいを支えるコミュニティー ～地産地消の食事作りの実践から～」というテーマで開催された北陸ブロック主催の現場セミナーに参加した。障がいのある人たちが、生きがいを感じながら生き生きと働ける場、NPO法人「小さな種・こころ」の活動に心打たれた。働いている皆さんの笑顔と、なにより皆さんが丹精込めて育てた無農薬の野菜がなんとも優しく、美味しかった。野菜が「食べて、食べて」と語りかけているように思えた。人は、美味しいものをいただくと自然に顔がほころび、こころが優しくなる。そして、思いやりは数倍ふくらむ。

その後、「小さな種・こころ」の活動がどう展開され、発展していったのかが、たいへん気になっていた。今回の現場セミナーは、やはり、期待通り、いやそれ以上のものだった。まず、会場に入って驚いた。23年間、眠っていた駅公舎とは思えない素敵で知的な「駅ライブラリーtetote」、「手作り感」があふれている。会場は、「こころ」で働く人々、こころを病むご本人とご家族、特別支援学校の児童とご家族、高校の先生、一般市民、大学生、学会員、そして鯖江市長と行政関係者 74 名で埋め尽くされた。始まる前からその熱気に圧倒されたのはいうまでもない。セミナーを創り上げた主催者の方々の企画力・実践力、人間的魅力に頭が下がった。

石井バークマン麻子理事は冒頭の挨拶の折、現場セミナーの主旨説明で二つのキーワード「多様性とチャレンジド」に

ついてふれた。「人は誰しものが課題を抱えながら生きている（チャレンジド）、そしてそれは一人ひとり異なる（多様性）、それをお互い認め合いながら生きていくことが、今こそ求められている」という意味の話しが、すっと落ちた。生きにくい社会にしているのは、当の私たち本人だと気付かされた。誰にだって、居場所はある、活かされる場があるはずだ。そこを見つけること、出会うことが難しいのであれば、少しでもサポートし合えば、“小さな種・こころ”のようなあたたかで、ゆるい場が生まれる。“小さな種・こころ”が、鯖江市が呼びかけた「協働パイロット事業」の一環として2005年に誕生して10年。その10年の歩みは、そんなに簡単なものではなかったことは容易に想像できる。7年を経た2012年に、“小さな種・こころ”は独立してNPO法人に移行し、今に至った。この経緯からも、皆が「求めていた場」が「求められる場」として“小さな種・こころ”を誕生させたように思う。公としての行政、民としてのNPO法人、障がいをもつご本人たち、そして市民、その四者の絡みがあってこそ、その土地に合ったものが生まれ、皆がそれを育てていく。まさに福祉文化の根づきではないだろうか。

シンポジストとして、勇気を出してご自分の心の病を丁寧な言葉で伝えて下さった小林さん・松田さん・奥野さん、自閉症の娘さんの将来を憂う畠中さんの一言一言が重く心に響いた。「10年間も起きることができない」「優しい職場なのに恐怖で会社に行くイメージがつかない」「起きたら、絶望感に襲われる」・・・目の前の一見、なんともないような方々が放つ壮絶な言葉。うつ病、統合失調症、自閉症等々、心の病をもった方々の心の動きは、私たちには到底わからない。想像はできるし、分かろうとすることもできるが、正直、限界がある。どうしても行き詰ってしまう。私にはユーモアに聞こえた小林さんの「今日、行けば、明日は休める」、松田さんの「自分の病気は日替わり定食」という言葉に、なんともほのぼのとした気持ちになり救われた。私も「今日は行きたくないなあ〜」と思うことがある。そんな時は「小林流」でいく。心がもやもやとしてどうしようもない時は、今日の「日替わり定食」で片付けてしまおう。お二人の言葉、いただきである、とても気持ちが楽になった。自分の言葉で心の内を話せるということは“こころ”に、受け入れられている安心感と、なんともいえないゆるさがあるからだろう。そんな皆さんの心の内を配慮ある言葉と優しい表情で引き出された宮川さんも絶妙だった。畠中さんから「障がいをもつ娘を30歳までに親元から離すのがいいのか悩んでいる。自立生活を送れるグループホームが鯖江にはない。“こころ”さんで作って欲しい」という切願に、笑みを絶やさず清水さんには、次なる夢が描かれているのではないかと思ったのは私だけではないはずだ。さらなるNPO法人“小さな種・こころ”の発展に期待してしまう。石井さんは、研究者からの発言を極力控え、時間の限り、会場の参加者から多くの意見を引き出された。当事者の方が主役の場にいることを、あの熱気の中から十分に感じ取ることができた。鯖江には、我が問題として捉え、しっかり発言するという土壌が育っているとひしと感じた。こういう生の声が市民を、地域を、社会を変えていく。肢体不自由をもつご本人からの「保護者の目の届くところだけで生活するのはおかしい」という発言が、心に残った。では、どこで生活するのか、いわずもがな「地域」である。障がいをもつ本人が「地域」に出る勇気を持ち、それを受け入れる「地域」が育たなければ、実現しない。今、国は「地域包括ケア」を声高に叫んでいる。「地域が育たない」という声を聞くが、そうではなく、育てようとしただけではないかと思う。鯖江のNPO法人“小さな種・こころ”の実践をモデルに「地域づくり」に取り組めば社会は確実に変わっていく。

今回の現場セミナーは、NPO法人“小さな種・こころ”の実績と、石井さんの研究者としての裏付けで、日本福祉文化学会の目指す、まさに「研究と実践」が融合した素晴らしい内容となった。

プレッシャーをかけてはいけませんが、数年後、さらに発展したNPO法人“小さな種・こころ”の姿をみたいというのが正直な思いである。ブランドとしてデビューする「越のてまり」や数々の生産物への応援、取り組みの紹介等々への協力は惜しまない。

以上